

40・50代単身者の生きがいとネットワーク

—「40・50代の不安と備えに関する調査」より—

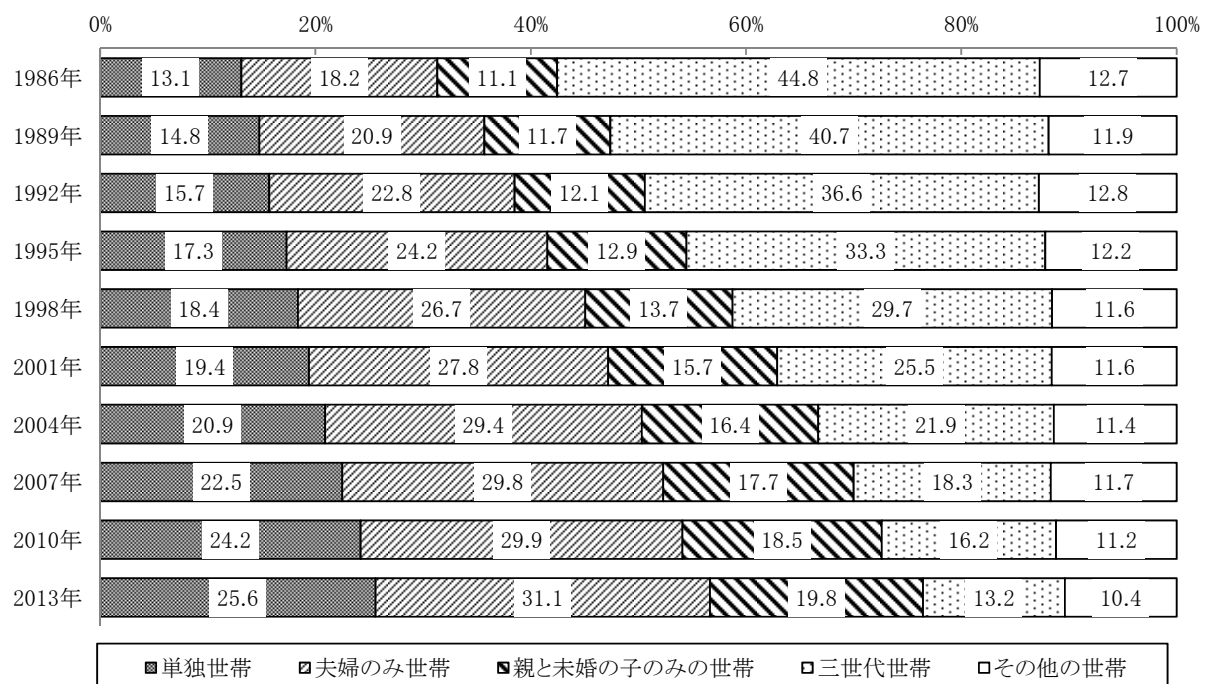
主任研究員 北村 安樹子

< 2種類の高齢独居予備軍 >

現在、わが国の65歳以上の高齢者のいる世帯のうち「夫婦のみ世帯」は約3割を占めており、「単独世帯」と合わせればすでに半数を超える（図表1）。また、「親と未婚の子のみの世帯」も約2割を占め、年々増加している。

高齢夫婦のみ世帯の多くは、将来、配偶者と死別するなどして独居化する可能性があるが、親と未婚の子のみの世帯もまた、子が未婚のまま別世帯を形成することなく親が先に死を迎えれば、単独世帯になる可能性がある。このようにみた場合、65歳以上の高齢者を含む世帯のうち、「夫婦のみ世帯」と「親と未婚の子のみ世帯」の2つの世帯類型を合わせた約半数を、将来の『高齢独居予備軍』を含む世帯とみることできる。高齢化が進む今後は、これらの人々が充実した高齢期を過ごせる社会を築いていくことが社会政策上の重要なテーマになる。

図表1 65歳以上の高齢者がいる世帯の世帯構造の構成割合



資料：厚生労働省「平成25年 国民生活基礎調査の概況」2014年7月15日

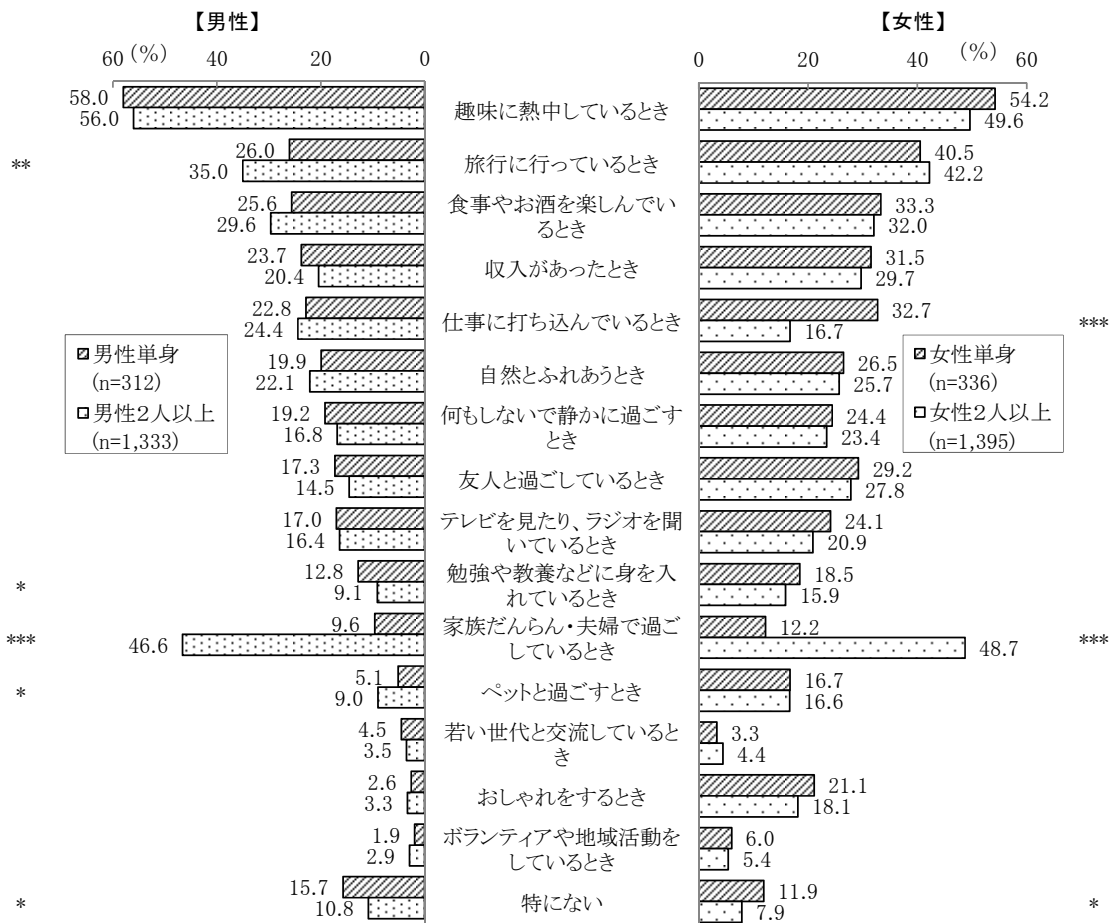
<40・50代単身者の生きがい>

このようななか、当研究所では、高齢期を迎える前のライフステージにある40・50代の男女3,367名を対象に、「40・50代の不安と備えに関する調査」を実施した。本稿ではこのなかから40・50代の単身者に注目し、主には2人以上の世帯との比較から、生きがいと人づき合いの実態をみる。

はじめに、40・50代単身者の生きがいを2人以上世帯と比較したところ、最も大きな差がみられたのは男女とも「家族だんらん・夫婦で過ごしているとき」をあげた人の割合だった(図表2)。単身者の多くは未婚者であることから、親やきょうだい、甥・姪などと過ごす時間を生きがいとしてあげた人は、1割前後に過ぎないことがわかる。

一方、単身男性の15.7%、単身女性の11.9%は生きがいを感じるたびに「特にない」と答え、この割合は2人以上世帯に比べて男女とも統計的に有意に高かった。また、「特にない」と答えた人の割合は、単身女性より単身男性で高かったが、結婚経験や配偶者の有無による差はみられなかった(図表省略)。

図表2 40・50代男女が生きがいを感じる時(性・世帯形態別)<複数回答>



注 : χ^2 検定結果 *** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05

資料: 第一生命経済研究所「40・50代の不安に関する調査」2013年。調査対象者は全国の40・50代男女3,376名。調査時期は2013年11月。調査方法はクロスマーケティング社のモニターを用いたインターネット調査。

なお、単身者のうち生きがいがない人は少数派で、大半の人はさまざまな生きがいをもっている。最も多かったのは男女とも「趣味に打ち込んでいるとき」であり、単身男性の58.0%、単身女性の54.2%があげた。ただし、2人以上世帯との間で統計的に有意な差がみられた項目は、「家族だんらん」と「特にない」の2項目に加え、男性では「旅行に行っているとき」「勉強や教養などに身を入れているとき」「ペットと過ごすとき」の3項目、女性では「仕事に打ち込んでいるとき」のみである。単身男性では学習の時間、単身女性では仕事に打ち込んでいる時間に生きがいを感じる人が2人以上世帯の人に比べて多い一方、単身男性にとって旅先で過ごす時間やペットと過ごす時間は、2人以上世帯の男性に比べて生きがいを感じる時になりにくいものだと考えられる。

<単身男性では、生きがいがないことがネットワーク形成の実行度の低さに関連>

次に、単身者のネットワーク（人づきあい）の実態をみてみよう。

図表3は、40・50代の単身男女におけるネットワーク形成の実行度を、性・世帯形態・生きがいの有無別に比較したものである。これをみると、男性の場合、生きがいの有無はとりわけ単身者のネットワーク形成行動の実行度の差と強い関連がみられ、生きがいがない単身男性では、生きがいをもつ単身男性に比べて、年代や性別などといった友人の多様性の面だけでなく、友人の数の面でも少ない傾向にある。

例えば、単身・生きがいなしの男性のうち、「できるだけ多くの友人をもつこと」ができていない人は4.1%であるのに対し、単身・生きがいありの男性では40.5%である。2人以上世帯の男性の場合、友人の数だけでなく、多様性に関しても、生きがいの有無による差は小さい。

<女性では、生きがいの有無が2人以上世帯でもネットワーク形成の実行度に関連>

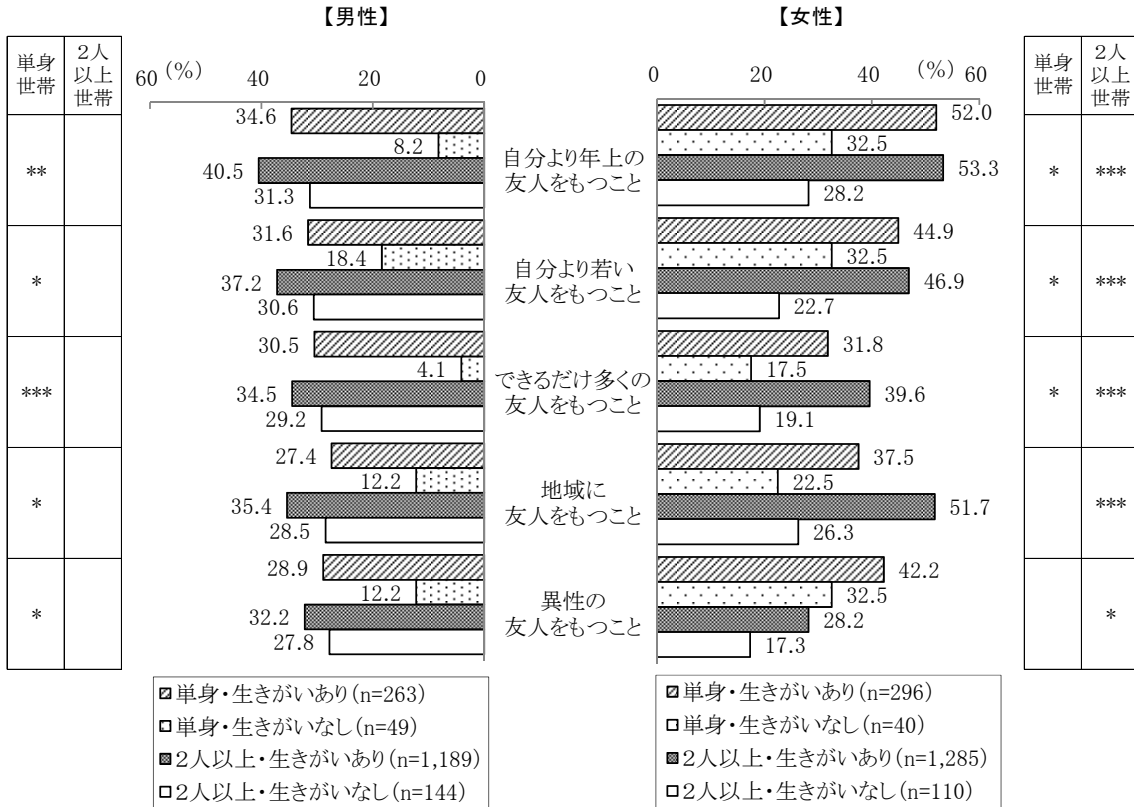
これに対して、女性の場合、生きがいの有無は単身者だけでなく、2人以上世帯でもネットワークの形成行動の実行度と強く関連している。例えば、「できるだけ多くの友人をもつこと」ができていない人は、単身・生きがいあり女性の31.8%に対し、単身・生きがいなし女性では17.5%、2人以上・生きがいあり女性の39.6%に対し、2人以上・生きがいなし女性では19.1%と、いずれも10ポイント以上の差がみられる。このような傾向は、「自分より年上の友人をもつこと」「自分より若い友人をもつこと」に関しても共通する。

注目されるのは、女性の場合、「地域に友人をもつこと」の実行度と生きがいの有無の関連性が、単身者ではなく、2人以上世帯においてのみ有意であった点である。

「地域に友人をもつこと」ができていない人の割合は、2人以上・生きがいあり女性の51.7%に対し、2人以上・生きがいなし女性では26.3%と、20ポイント以上も低い。このような傾向は単身女性でもみられるが、統計的に有意ではなかった。「地域」とい

う限られた範囲でのネットワーク形成行動の実行度に生きがいの有無が影響するかどうかは、男性の場合、単身世帯においてのみ関連があるが、女性の場合、2人以上世帯においてのみ関連があるといえる。

図表3 40・50代男女のネットワーク形成行動の実行度(性・世帯形態・生きがいの有無別)



注1：「できている」「ある程度できている」と答えた人の合計割合

注2： χ^2 検定結果 *** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05

資料：図表2に同じ

<40・50代単身者の生きがいとネットワークの可能性>

先にもみたように、生きがいのない40・50代の単身男性ではネットワーク形成行動の実行度が際立って低い。しかし、見方を変えれば、男性の場合、単身者であっても、生きがいをうまくつけられれば、2人以上世帯の男性と同じ水準のネットワークを形成することにつながる可能性があると考えられる。

一方、生きがいのない40・50代の単身女性が生きがいをもつことは、異なる年代の友人や数の面では2人以上世帯の女性と同じ水準のネットワークを形成することにつながる可能性がある。生きがいを通じて、地域社会という範囲にとどまることのない幅広いネットワークを形成できるのではないだろうか。

(研究開発室 きたむら あきこ)